

# チャレンジ自給菜園



空き地に種を蒔こう！来たるべき食糧難時代に備えて

野菜を自給できれば、安全で安心です。

取りたての新鮮なものを食べることができます。

それだけではありません。

菜園は、楽しみの場、癒やしの場、学びの場(体験学習)であったりもします。

これからは、菜園の役割は、さらに重要度を増していくことでしょう。

その一つが、食料確保のためのコミュニティー菜園です。

今のうちに、その体制を作っておかなければなりません。

周知のとおり、日本の農業は、今、危機的状況にあります。

早晩、国産野菜は食べられなくなるでしょう。

これは、日本のみならず、地球規模の問題です。

土壌の損耗や薬剤抵抗性害虫の問題は、世界中で深刻化しつつあります。

肥料資源も、そのうち枯渇します。

自然から乖離した農業では、淘汰される運命から逃れられません。

日当たりがよく、雑草が生えているようなところであれば、野菜は育ちます。

庭に、空きスペースがあれば、種を蒔いてみてください。

身近に、耕作放棄地があれば、菜園作りにトライしてみてください。



## 自給菜園のための栽培法

でも、いざ、菜園を始めると戸惑うことばかりです。  
つい、マニュアル頼みになってしまいます。  
そして、深く耕して土をほぐし、石灰や元肥を入れて...となります。

でも、それでは、土壌の生態系を破壊してしまいます。  
そして、土中には、硬盤層ができてしまいます。  
それを、清浄化するために、多くの害虫が発生することになります。  
そうなると、農薬も必要になってきます。  
そんなことを続けていると、土壌も砂漠化し、野菜は育たなくなります。

自給菜園では、なにも、大量生産を目指しているわけではありません。  
生育速度や収穫時期を均一にする必要もありません。  
(逆に、一斉に実ったら食べきれません)  
そして、箱詰めや輸送のための規格野菜である必要もありません。  
あえて、雄性不念のF1種を使う必要もないわけです。

自給菜園では、高品質で健康的な野菜を、持続的に栽培することが目的です。  
そのために必要なのが、土壌の健全化(清浄化・安定化)です。  
土壌は、野菜にとって、私たちの腸と一緒にです。(野菜の体の一部です)  
その健全化のための方法が、無施肥であり不耕起(浅耕)です。  
それにより、根の張りが良くなり、菌類との共生関係も築かれます。  
健全な土壌では、連作障害も起こりません。  
虫害に遭ったり、病気になったりもしません。  
そして、硝酸態窒素濃度の低い健康的な野菜に育ちます。

## 自給菜園に適した種は

昔の農家は、できの良い野菜から種を採って...翌年にそれを蒔いて...  
というのを繰り返していました。  
つまり、種は、代々、受け継がれるものでした。  
こうした種のことを固定種といいます。

でも、今では、そんな農家は皆無です。

種は、毎年、買うのが当たり前になっています。

こうした種のことをF1種(交配種)といいます。

では、なぜ、毎年、種を買う必要があるのかというところ...

このF1種というのは、流通に適するように品種改良された種です。

したがって、育った野菜は、見た目がきれいで、サイズや形が揃います。

表面が固く長距離輸送にも耐えられます。

たとえば、小松菜といっても、チンゲンサイやタアサイと掛け合わせています。

F1種は、見た目重視の消費者ニーズにマッチし、またたく間に普及しました。

そして、F1種と慣行農法一色に塗り替えられることになりました。

しかし、これが、後に大きな弊害を生むことになりました。

昔の農家は、その土地に合った野菜を育てていました。

つまり、適地適作で無理をしていません。

これは、自然に沿ったもので環境への負荷も少なく、持続が可能でした。

ところが、F1種は、栽培される土地で育った種ではありません。

(今では、9割以上の種は海外で生産されています)

つまり、種が、その地になじんでいないので適地適作ができません。

そのため、どうしても、肥料や農薬、除草剤に頼らざるをえなくなります。

そして、環境や生態系を破壊し、野菜が育たなくなってきました。

結局、農業を続けることができなくなるというのが実情です。

自給菜園では、高品質で、健康的な野菜を、持続的に栽培することが目標です。

したがって、昔ながらの固定種が適しているということになります。



## 種を育てる醍醐味

F1種では、均一に育つというのが売り(特徴)です。

それは、サイズや形など見た目のことだけではありません。

生理的な性質(形質)も均一ということです。

したがって、何かしらの病気がはやると、一気に病気が広がってしまいます。

固定種では、同じようなケースでも全滅することはありません。

それが、何を意味するのかというと...

固定種は、遺伝的な多様性を備えているということです。

この多様性という特徴を、最大限に活かせるのが自家採種です。

はじめて、種を蒔くと、最初の年は育ちが良くないのが普通です。

そんな中でも、育ちが良い株が現れます。

種を採るのは、そんな株からです。

そして、翌年に、その種を蒔きます。

その繰り返しで、だんだん、その土地になじんできます。

そして、旺盛に育つようになってきます。

また、人それぞれに、野菜の味や形の好みというのがあります。

そういった自分の好みのものを選抜して種を採っていけば良いのです。

それによって、自分のオリジナル野菜に変わっていきます。

これは、何も特殊なことではありません。

一昔前までは、ごく当たり前に行われてきたことです。

人類は、そうやって、長い歴史を種と共に生き抜いてきたわけです。

固定種を育てる醍醐味は、このように種を育てていくところにあります。

長い年月をかけて育てた種は、とてもとても貴重です。

そんな種が、いざという時に、人類を救うことになるのかもしれない。



<https://www.seedlabo.jp/>  
シードラボ (学びの菜園)

